

海外・国内) 出張報告書 (学生用)

2016 年 6 月 14 日提出

氏名	横山 望
所属	獣医内科学教室
学年	4
出張先	American college of veterinary internal medicine (ACVIM) Forum 2016 場所：Colorado convention center, Denver, Colorado, United States
出張期間	2016/6/7 – 2016/06/13
目的	口頭発表のため

活動内容 (2,000 字程度、活動内容が判る様な写真や図表を加えて下さい)

American college of veterinary internal medicine (ACVIM) は、世界最大規模を誇るアメリカ獣医内科学会である。ACVIM は、循環器、大動物内科、神経科、腫瘍科、小動物内科の専門医制度を立ち上げており、専門医による新しい知見の発見、蓄積と生涯教育を通して獣医療を発展させ、ひいては社会貢献することを目的に設立された。ACVIM Forum は、ACVIM が主催する年次大会であり、1983 年の第 1 回大会から数えて 34 回目の開催となる。現在の参加者は 3000 人以上にのぼり、1 大会あたり 460 時間分のセミナー、パネルディスカッションなどが開催され、卒後生涯教育が盛んに行われている。文字通り、獣医内科の領域では世界最大の学術集会である。今回、私は ACVIM Forum 2016 にて口頭発表を行う機会を得たので、その概要を報告する。

ACVIM Forum 2016 は、アメリカ合衆国コロラド州デンバーにて開催された。会場となった Colorado convention center は Downtown の中心部に存在する (図 1)。会場は、大きく 3 つのフロアに分かれており、最上階の企業展示場を除き、2 つのフロアでは主に生涯教育のプログラムが組まれていた。20 以上の部屋はいずれも聴衆で満員となっており、活発な議論が繰り広げられていた (図 2)。私は主に消化器分野のセッションの研究発表、教育プログラムに参加してきた。内容は先進的なものが多く、日本の学会では収集できない情報が数多く存在した。また ACVIM では常に活発な質問が会場より発せられており、日本の学会のおとなしい雰囲気とは大きな相違を感じた。

私の口頭発表は、学会 3 日目に行われた。今回の発表に際しては 3 人の ACVIM の専門医による抄録の厳正な審査が事前に行われており、私は幸運にも消化器分野のセ

セッションにて口頭発表を行う機会が得られた。本発表は、犬の慢性腸症症例の血漿必須微量元素濃度を誘導結合プラズマ質量分析計（Inductively coupled-mass spectrometry, ICP-MS）を用いて測定した報告である。犬の慢性腸症では、消化管の慢性的な炎症により吸収不良が引き起こされ、様々な栄養素の不足が引き起こされる。代表的な例として、水溶性ビタミンである葉酸、コバラミンが挙げられ、これらの栄養素は犬の慢性腸症の負の予後因子であるだけでなく、不足していた場合は補充療法を実施することにより予後が改善するとされている。そこで本研究では、水溶性ビタミンと同様に重要な栄養素のひとつである必須微量元素に着目し、犬の慢性腸症症例において体内の必須微量元素欠乏が生じるのか調査を行った。その結果、犬の慢性腸症症例と健常犬間で血漿必須微量元素濃度に有意な低下は認められず、欠乏は示唆されなかった。そのため必須微量元素補充の必要性は低いものと考えられた。本研究は、犬の慢性腸症の血漿必須微量元素濃度を網羅的に解析した初めての報告であり、必須微量元素の補充療法を考慮する上で必要な情報を提供できたと考えている。私の発表に対して、会場からは対照群の組み入れについて質問があった。私の研究では、対照群としてリサーチコロニーのビーグル犬よりサンプルの採取を行ったが、質問者からは、消化器疾患を持たない健常な症例犬を対照群に組み入れるようにコメントをいただいた。私の質疑応答に対してもコメントがあり、聴衆に一定の興味を引き起こすことはできたと考えている。

その一方で、本学会では大きく2つの反省点が生じた。一つは、口頭発表での自己表現力である。質疑応答において、自分の言いたいことをうまく表現出来なかったように感じた。その大きな原因として英語によるコミュニケーション不足が挙げられるが、英語による質疑応答対策は一朝一夕で完成するものではない。日頃から少しずつ努力する必要性を今更ながら強く感じた。後輩には、できるだけ早い段階で国際学会の発表を目的に準備するように薦める。もう一つは、学会期間中の研究者間のディスカッションにうまく参加できなかったことだ。この原因もやはり英語の能力の欠如によるものであるが、英語でコミュニケーションを取るためには、口頭発表で必要な英語とは異なった技術が必要だと感じられた。具体的には、英語による日常会話の能力が必要だと考える。同じ英語でも、より具体的な状況に応じて（口頭発表、ディスカッションなど）訓練しておくことが重要だと思われる。これらの点を踏まえ、今後も継続して自分の研究成果を国際学会で示して行きたいと考えている。

最後に、このような貴重な発表機会を支えてくださった滝口教授、堀内教授、また渡航の手配していただいたリーディング事務局の榎さん、渡部さん、寺嶋さんに深謝致します。



図 1. 会場概観

図 2. セミナー風景

図 3. 発表風景

指導教員確認欄	所属・職・氏名： 獣医内科学教室・教授 滝口 満喜 印
---------	-----------------------------------

※1 電子媒体を e-mail で国際連携推進室・リーディング大学院担当に提出するとともに、指導教員が押印した原本を国際連携推進室・リーディング大学院担当に提出して下さい。

提出先：国際連携推進室・リーディング大学院担当

内線：9545 e-mail: leading@vetmed.hokudai.ac.jp